

Visva-Bharati University の訪問報告

(International Conference on Advancement in Science & Technology (ICAST2018))

インドの東部、西ベンガル州のサンティニケタン (Santiniketan) にある Visva-Bharati University で International Conference on Advancement in Science & Technology (ICAST2018) が 9 月 3–4 日の日程で開催されました。この会議は、日本学術振興会 (JSPS) とインドの JSPS 同窓会組織 (Indian JSPS Alumni Association (IJAA)) が毎年テーマを決めて行っている二国間の国際シンポジウムです。構造熱科学研究センターに 2015 年の 9 月から 12 月まで客員教授として滞在して頂いた、Visva-Bharati 大学の Ashis Bhattacharjee 先生が本年の組織委員長になり、開催されました。Ashis 先生は 1998 年から 2000 年まで当時の分子熱力学研究センターで JSPS の研究員として祖徠先生のグループで熱力学的な研究をされておられました。その縁があり、母国に戻られてからも IJAA のメンバーとして活動されており、本年、組織委員長をされることになりました。

昨年 (2017 年) の秋、福岡で行われた CATS-2017 と熱測定討論会にお越し頂いた際に、是非ともサンティニケタンに来るようにお誘い頂きました。Ashis 先生とは Spin Crossover 錯体での共同研究も進んでおり、研究議論の非常に良い機会でもあるため、是非ともと訪問させて頂きました。9 月に入ったとはいえ、まだまだ猛暑のさなか、さらに台風 21 号が近づいて天候も安定しない中での出発でしたが、学術振興会のお世話になり、9 月 1 日に日本を立ち、香港経由でコルカタ、そこから車でサンティニケタンまで無事に移動することができました。Ashis 先生と奥様の Rupama さんとも再会することができました。

日本からの参加者は、化学、物理の研究者と日本の大学で働く同窓会の役員の先生、学術振興会の方あわせて総勢 10 名でしたが、Ashis 先生と現地の組織委員の皆さまに歓迎して頂き、おかげで滞在を楽しむことが出来ました。

2 日間の短いシンポジウムですが、内容は盛りだくさんでした。初日の朝、全体のセレモニーがあり、会議場になった Visva-Bharati 大学側の代表である副学長 Sen 先生、IJAA の代表、学術振興会のコルカタ支部長、日本の国際交流課長、シンポジウムの組織委員長の Ashis 先生らが燭台へ献火され、ご挨拶をされました。その後、サイエンスに関する講演が進められました。内容は、分子性の材料を中心に合成から物性、測定手法様々でしたが、インドの研究者、特にコルカタ近くには Kumpur にあるインド工科大学を中心に多くの大学あり、若手の研究者が非常にレベルが高く、研究者層も非常に厚いようです。中澤は、日本サイドからの Plenary 講演に選んで頂き、“Novel Magnetic and Superconducting Features of π -Electrons in Molecule-Based Compounds”というタイトルで 50 分の講演を行いました。インドの研究は、IT テクノロジーや先端材料の開発の印象がありますが、物性分野の化学、物理の基礎分野も非常にアクティブだという印象を受けました。また、ポスターセッションでは、インドの大学院生の方の発表をいろいろ聞くことが出来ました。熱分析や熱伝導の測定をしているグループもありましたが、市販装置が中心で、精密な熱測定が必要な実験については共同研究の可能性も議論しました。第 2 日目の夕方にある高校生に向けた日本の大学紹介のプログラムにも参加させて頂きましたが、学生さんたちの積極性に驚きました。シンポジウムの前日のレセプションと 1 日目の夜のバンケットは、滞在していた Camellia Hotel で行われ、様々な香辛料のきいた料理を頂きながら、インドの研究者と交流をすることが出来ました。

サンティニケタンの町は、大都市コルカタから幹線道路を 3 時間半北西方向に走ったところにあります。コルカタの大喧噪と渋滞をぬけると平らな田園地帯が続き、どこまでも同じ風景が続きます。サンティニケタン近辺は逆に自然公園になっており、天然の林の中を道路が貫いているかたちです。日本とは、あまりに違う風景が展開されます。このような大都市から離れたところに位置しますが、東西の学術の交流地点であり、Visva-Bharati 大学は 1913 年にアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞した詩人であるタゴールが作った大学(タゴール国際大学)として知られています。タゴールの著作であるギタンジャリは世界中の言語に翻訳され、東洋的な発想とその優れた抒情性が高く評価されています。その意味でもインドの人にとっては、学術や精神の中心として非常に大事にされている場所になります。今でも、当時から行われていた伝統に従い、大地に座り青空のもとでの授業は引き継がれて行われているとのことで、サンティニケタンのガイドブックにはそのような写真が使われています。大学そのものも大きく、日本語学科も含めて様々な学科があり、多くの学生さんたちが生活している町のようなようです。町の中心部は活力があり、多くの車や自転車、バイクが行きかい、またその中に犬や牛といった動物もあり、コルカタとは違った喧噪がありました。Rupama さんに案内をして頂き、タゴールの博物館や大きなバンヤンの樹(写真)、タゴールの暮らしていた複数の家(季節に応じて、住みわけていたようです)を見学させて頂きました。

滞在中、心配していた台風 21 号が関西を直撃してしまい、関西空港が高潮による浸水とタンカーの橋への衝突で閉鎖されてしまいました。帰りの便を遅らせ東京経由に変更しましたが、乗り継ぎで待っていた香港で北海道の地震を聞きました。現地の方からも心配とお見舞いの言葉を頂きました。Ashis 先生、Rupama さん始め、組織委員の先生方に御礼申し上げます。

(中澤康浩)



Plenary lecture by the author explaining Osaka University and RCST.



Prof. Ashis Bhattacharjee and his students who organized the symposium and several events.



Photo picture of Japanese participants with Ashis-san and Rupama-san.